佐藤清明資料保存会会報

No.１４

博物学者 佐藤清明（1905-1998）

佐藤清明資料保存会

里庄町立図書館

2025.3.25.

第 14 号　もくじ

１．あいさつ　佐藤清明資料保存会　副会長 田中孝治　1

２．巻頭論考　清明さんと方言研究 ～ 橘正一との交流から ～　藤井成加　2

３．清明資料解題

　　清明の投稿「採集小話　回顧五年」を発見！　小野礼子　13

４．アーカイブ・雑誌「土の香」創刊 5 周年記念号(1933) 掲載

　　採集小話　回顧五年　佐藤清明　14

５．訃報　当会顧問土岐隆信様　17

６．惜別　土岐隆信さんを悼む　名誉会長 生宗脩一　18

７．ルポ　ある寒い冬の日に　－菊桜育成保存会の活動の一コマー　19

８．編集後記

表紙写真：第六高等学校理科教室助手時代の佐藤清明（20代）

あ い さ つ

副会長　田中 孝治

近年になく寒い冬でしたが、里庄図書館の椿は大きな花芽を膨らませ、山茶花は美しい花を咲かせています。ヒヨドリをはじめ、ツグミ・ジョウビタキなど数種の野鳥が図書館の木々を格好の遊び場にしているようです。多くの利用者だけでなく、野生の生き物たちも図書館を愛してくれているようでうれしいです。

私は、十数年前に里庄東小学校に勤務していましたが、そのときには郷土の偉人として仁科芳雄博士と小川郷太郎大臣の二人しか存じ上げませんでした。この度、縁あって再び里庄町で務めさせていただけるようになり、初めて博物学者の佐藤清明さんに出会った次第です。図書館のカウンターに置いてあるパンフレットや当会編の本を読み、民俗学から植物学・動物学等にわたり幅広く標本収集と調査研究を進められた権威であることを知りました。

有名な柳田国男（国語の教科書に「遠野物語」が載っていたので、教材研究で知った。）、南方熊楠（伝記を読んだことがある。）、牧野富太郎（大学の植物学の教授の尊敬する先生だったと聞いていた。）などの方々とも、調査・研究をともにしておられたような立派な方が里庄町におられたということは、誇りに思えることです。また、その貴重な資料を保存し、資料の研究を通して清明さんの業績を顕彰しようという会があるということこそが、さらに素晴らしいことではないかと感じています。研究内容や活動内容を情報発信することで、清明さんや里庄の知名度を上げるとともに、郷土を愛する心を育むことにも繋がるのだと思います。

今年度は、「全国植樹祭・岡山２０２４」の会場で、皇后陛下が「菊桜」を植樹されました。それを記念して町内８カ所に「菊桜」を記念植樹しています。「菊桜育成保存会」の皆さんが、接ぎ木をして「菊桜」を増やす活動もしておられます。清明さんが繋いだ「六高の菊桜」が、勢いを増して広がり有名になるように、本会の活動もさらに広がり活性化することを期待しています。

巻頭論考

佐藤清明と方言研究 ～ 橘正一との交流から ～

藤井成加

はじめに

橘正一という人物に行き当たったのは、佐藤清明資料保存会で岡山文庫に『博物学者佐藤清明の世界』附録「現行全国妖怪辞典」（注１）を上梓するにあたって、資料保存会で保管している未発表の資料の中から分担して執筆することになり、筆者が「全国菫方言集」を選んだことによる。

「全国菫方言集」の中で清明が参考文献に挙げていた中に、柳田國男と並び橘正一の名があった。そして、本文中に「橘正一氏が菫の方言に就て記述されて居るのについ興味を引かれ、私も方言用紙を早速に整理してみたら百五以上あった」という記述があった。つまり、橘氏に触発されてこの「方言集」を書いたということだ。この橘という人物はいったいどのような人物なのだろうと思い調べてみたところ、いろいろなことが分かった。折もよく令和2年8月から岩手県立図書館で橘氏の企画展が行われた。同館のＨＰから橘氏について引用する。

1. 橘正一の人生

岩手県立図書館企画展「おらほの言葉～橘正一没後80年展～」より

橘正一（たちばなしょういち）は、明治35年（1902）盛岡市新馬町中通りに生まれた。橘氏は数学に長じ、大正8年（1919）盛岡中学校の4年級から仙台の第二高等学校理科甲類に入学する。この時、橘氏の母は、仙台は方角が良くないと言い進学に反対したという。医学専攻を志していた橘氏だったが、卒業直前、結核による肺浸潤のため、帰郷を余儀なくされる。高校卒業の資格は与えられたものの、そのまま病臥する身となった。橘氏はやがて土俗、方言の研究において、熱心に活動するようになる。一時健康を回復した橘氏は、昭和12年（1937）第2学期より、私立岩手商業高校及び私立岩手高等予備校の国語教師に就任した。しかし、学校に勤めるようになってから健康状態が再び悪化。約半年後辞職し、再び病の床に伏すようになる。橘氏は病臥中、訪問客を極度に嫌い、特に再悪化してからはほとんど誰にも会わなかったという。橘氏は、同15年（1940）、39歳の若さで没した。

清明は明治38年（1905）生まれなので、橘氏より三才年下になる。金光中学校在学中から文学の高い才能を見せていた様子、

東京帝国大学に入学を希望したが、母の反対にあい進学できなかったこと、福岡県小倉中学校の生物教諭となるがわずか1年で結核を患い帰郷したこと、健康を回復して岡山で教職に就き方言をはじめ民俗学、植物などの収集、博物学、天然記念物・文化財の保護など多岐にわたって活躍した様子の中で、橘氏と重なるところが多くある。

2. 橘正一の仕事

病身の橘氏が方言研究を志したのは父・正三の感化もあったと思われるが、妹の娘には「方言をやっていれば寝ていても食えるからな」と冗談半分に語ったことがあった。

橘氏はことばを通じて民衆の思想・感情を知り、その歴史を明らかにしたいという思いで、闘病の傍ら全国の方言を研究した。当時の方言研究について、橘氏は「日本の方言研究は明治期に一度盛んになり、昭和に入って再び興隆を見た。当時からすでに方言の衰退は進み、やがては消えるのではないかという懸念が強まっていた。それらを今のうちに収集し記録しておかなければ永久にその機会が失われてしまうと、半ば愛惜の念に駆られて多くの方言集が編まれたのだ」と言っている。（『方言読本』「課外 昭和方言学者評伝」厚生閣1937年）

橘氏は昭和5年(1930)29歳の時、会員組織で『方言と土俗』(謄写版)を創刊する。会員は３府30県にわたり、冊子は200部刷られた。同誌は同９年(1934)通計45冊で廃刊となった。同11年(1936)育英書院から『方言学概論』を出版。翌12年(1937)、厚生閣から『方言読本』を出し、翌月重版となる。

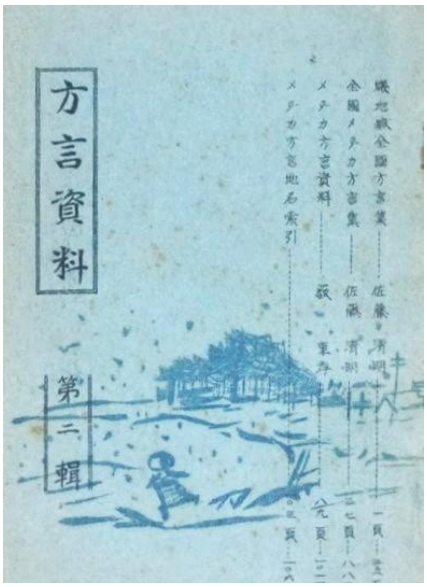
橘氏は病勢が悪化してからも、研究発表のため方言個人雑誌(謄写版)の刊行を計画した。また、昭和３年以来既刊の方言集から13万枚のカードを作成し、これを部門別に分けた。『分類全国方言辞典』は同14年(1939)より刊行されるが、第４巻を限りに中絶する。

３．清明と橘正一

清明は、同世代の方言学者、橘正一が発行していた『方言と土俗』に昭和5年～8年の間参加していた。清明がなぜ方言の収集を始めたのか。それについては、第4巻第3号の「方言研究者合評会（佐藤清明氏の巻）」（昭和8年7月10日）で、5人の研究者が清明について語った中に出てくる。清明は、「牧瀬（注2）という地名や地理関係の方言を集めていた人に感化された。そして、柳田國男により自分も方言を集めてみようという気になった（注1第2章第1節参照）」と言っていたという。そして、清明は「全国メダカ方言語彙」（『国語教育第16巻9号』昭和6年9月1日）で、次のように述べている。

（前略）メダカの方言は限り無くある。しかも其の各々は標準語の普及と共につゝある。（中略）方言を研究してそれが何になるかと、こんな議論のみに徒に時を費して居る間に、（中略）方言は遠慮も無く、スタスタと再び現れざる世界に刻々没していきつゝあるではないか。私は今日は理窟を避けて、たゞメダカ方言語彙のみをご紹介し度い。（後略）

当時清明は、動植物・民俗など同時にいくつもの方言を収集して、橘氏の『方言資料』(昭和6年)など機会があれば次々と発表していた（添付年譜）。清明は、岡山県の中である程度（三百語を目指していた）方言が集まると「予報」を出し、日本魚学の権威、田中茂穂（注１、第一章一節参照）をはじめ各分野の権威に捧げ、各地からの方言の報告を「方言報告カード」で募った。柳田国男をはじめ研究者にも協力を仰ぎながら、語彙が増えるたびに収集した方言の範囲を全国に広げて発表していった。



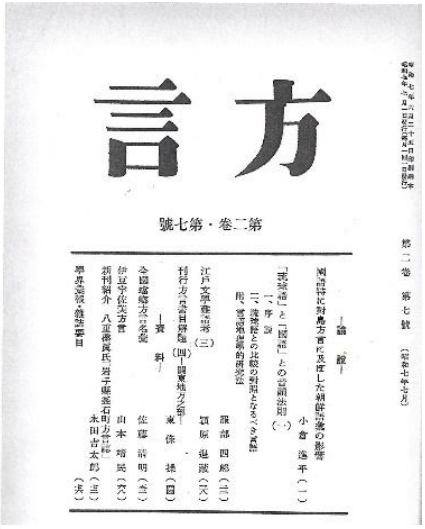
里庄町立図書館所蔵

清明は『岡山文化資料』3巻5号（昭和6年）で、「土俗や方言には門外漢で、研究の方法さえ十分未だ了解できて居らぬ」と謙遜しているが、前出の「合評会」で研究者たちは清明を絶賛している（ただし、この度『方言と土俗』に目を通していて、橘氏が一人5役で語っていたのではないかと考えている）。「合評会」では、「方言学界の現状は動植物学者の清明に牛耳られていて悲しい。彼は動植物方言分布調査では唯一人者だ。独創の研究の仕方が多いから、失敗も多かったと思うが、あれだけの努力を植物分布の調査に向けたら、今頃は第一人者となっていただろう」「清明には彼でなければできない仕事をやって欲しい。博物史をやってもらいたい」「清明ほどの器量があれば、何をやっても成功するだろうが、一生顕微鏡と睨めっこして終わるには惜しい。今までの採集を整理して全国植物方言辞典と全国動物方言辞典を作ってほしい」といった意見が書かれている。「合評会」の第1回が昭和方言学の父柳田國男、第2回が昭和方言学の母東條操、第3回が総領息子大田栄太郎、そして、事情が あって４番目にならなかったが、清明の「合評会」は４番目で掲載される予定だった。このことを考えると、少なくとも橘氏の中で清明の方言研究における働きはかなり高く評価されていた。それは、柳田国男が集めた方言のデータを清明が使うことを許していたことからも裏付けできる。清明は「合評会」の記事が出たとき、すでに『岡山縣植物方言辞典』（昭和6年8月15日　非売品50部限定）を作り上げていた。その後、『岡山縣動物方言辞典』(昭和11年4月1日 非売品

）が発刊されたが、全国版はまだ見つかっていない。

４．当時の方言学の流れ

橘氏によると、大正の暗黒時代を受けてまだ人は方言に目覚めず、ただ柳田国男と東條操とがあるのみ」だった。方言を毎号掲載する雑誌が廃刊になった後は、『岡山文化資料』と『旅と伝説』があるのみで、土俗採集家による方言の研究がようやく盛んになってきたところに『方言と土俗』が生まれた。『方言と土俗』は、方言研究の時代全体の流れを把握しつつ橘氏が毎号テーマを決め課題を提示しながら刊行していた。



国立国会図書館所蔵

東京に『方言』という専門雑誌が出たとき、橘氏は、「『方言と土俗』は土俗学者を主な読者としているので影響はない」と言った。もともと、方言のみならず土俗の報告を歓迎しつつ、方言調査用紙を同封して刊行していた雑誌である。つまり東京の学者を中心とした『方言』に対して『方言と土俗』は在野の地域の研究者を中心とした活動なので住み分けができているということだ。

しかし、どうして廃刊になってしまったのか。『方言と土俗』第4巻第7号（昭和8年11月）に掲載された「過去4年間を顧みて」（昭和８年11月）で橘氏は、「土俗学者が方言に対する興味を失い始めた。柳田さんをしても引き留められなかった。つらい別れだが方言学の協力者は土俗学者よりももっと有力な国文学者や小学校の訓導諸君の予備軍が控えている。方言は筆数の知恵。昭和2年とは違った意味で再び方言学の普及運動を始めなければならない。『方言と土俗』は不適当である」と、部数の減少ではなく『方言』の影響でもなく、時代の流れのために廃刊する決心をしたのだと言っている。

５．２人のその後

『方言と土俗』は昭和９年に廃刊しているが、昭和６年に発刊した『方言』に、清明は昭和7年から、橘氏は昭和8年から寄稿している。

清明は、昭和6年頃から和歌山県田辺在住の博物学者南方熊楠と交流を始める。柳田国男・南方熊楠という出会いを経て、博物学という自らの進む道を見定める。くしくもそれは、『方言と土俗』第4巻第3号の「方言研究者合評会（佐藤清明氏の巻）」（昭和8年7月10日）で望まれていたとおりになった。

橘氏は昭和15年、39歳の若さで没するが、『方言と土俗』廃刊後も『方言』にいくつもの論文を寄せて、方言学の普及活動に励み、『師範学校と方言集』（昭和8年）「方言語法研究の現状」（昭和10年）など発表している。

※「佐藤清明・橘正一活動年譜（『方言と土俗』『方言』を中心に）」については、今回『方言と土俗』第3巻第5号（昭和7年9月）に発見した清明本人がまとめた「佐藤清明氏方言関係報文目録」の内容と作り上げていた年譜を照らし合わせて確認の作業を行った。加えて、清明の報告による「略歴」が記されていたので年譜内に翻刻する。それぞれ発表年月日・標題など、まだまだ確認しなければならないことがたくさんあるが、ひとまず年譜の形にして記す。

〈年譜について〉

・『方言と土俗』「佐藤清明氏方言関係報文目録」に記載されていたものは年譜中に赤字で示している。『岡山文化資料』については奥山書店発行『再版岡山文化資料』上巻・中巻・下巻（昭和５４年）で確認のうえ、異なる部分、追加の情報を黒字で記している。『方言と土俗』の黒字部分については、確認が必要である。

・●は『方言と土俗』、▼は『方言』である。それぞれ研究に必要と思われる情報を抜き出している。

・年表中の文章は全て引用なので、表記敬称等そのままにしている。

・網掛けについて

灰色は『方言と土俗』第3巻第5号「佐藤清明氏方言関係報文目録」について

水色は佐藤清明「採集小話回顧五年」について

橙色は『方言と土俗』第4巻第3号の「方言研究者合評会（佐藤清明氏の巻）」に関わること

（注1）　岡山文庫323『博物学者　佐藤清明の世界』附録「現行全国妖怪辞典」佐藤清明資料保存会（令和3年10月26日）

（注2）　牧瀬貞一郎。今まで名前しか分らなかったが、このたび小野礼子が「採集小話回顧五年」（『土の香』：創刊第五周年記念号昭和8年（1933））本文を発見し本誌に掲載されたことにより、清明が方言の収集を始めた経緯が明らかになった。

佐藤清明・橘正一活動年譜（『方言と土俗』・『方言』を中心に）

	昭和３年（1928）	昭和４年（1929）	昭和５年（1930）
佐藤　清明 『方言と土俗』「佐藤清明氏方言関係報文目録、所、略歴」より	・柳田国男『民族』第３巻第５号「虎杖及び土筆」７月１日 ※方言の神秘に、深く、感動して、自分も集めてみようといふ気になッた ・『岡山文化資料』１号１２月１４日刊行開始。	・桂又三郎『岡山文化資料』「植物の方言と訛語（一）」一巻五号７月１７日 ※柳田国男「唾を」寄稿。関り開始。清明処女発表か？桂氏に請われて。 ・『岡山文化資料』「植物の方言と訛語（二）」一巻六号九９月２５日 ・『岡山文化資料』「植物の方言と訛語（補遺）」「岡山県俗習説輯報㈠」二巻一号１１月２日 ・『岡山文化資料』「岡山縣植物の方言と訛語（追加）」「岡山県俗習説輯報㈡」二巻二号１２月１３日	・『岡山文化資料』「吉備国川島河に於ける虬」附録「備中南部に於いて信ぜられる妖怪の一覧表」二巻三号１月２１日 ・『岡山文化資料』「岡山縣（県）植物の方言と訛語（承前）」「岡山県俗習説輯報㈢」二巻四号２月２１日 ・『岡山文化資料』「岡山縣に於けるイタドリの方言分析論（予報）」図２図、地図ツキ 二巻五号５月１日 ・『山陽新報』「六月頃に咲く山野の植物」６月１日～７日連載 ・『岡山文化資料』「続岡山縣植物方言（承前）」二巻六号６月２７日 ・『山陽新報』「蝶の種々相」７月１日～２日連載 ・柳田国男 単行本『蝸牛考』７月１０日 ※近頃岡山県に島村知章・佐藤清明が集めている。 ・『岡山文化資料』「南備後食植物考」三巻一号８月２６日 ・『岡山文化資料』３巻２号９月２６日「備中塩生植物目録」「岡山縣（県）に於ける蟻地獄の方言分布論（豫報６図入、地図ツキ）」※柳田国男より資料、花田一重より地図を借りる。各地の同士の方言や俗言の報告を求む。 ●『方言と土俗』一巻五号１０月２５日「全国蟷螂方言集（予報七九語）」 ※報告者の大部分は中等学校の博物教育諸氏である。 ・『岡山文化資料』「続岡山縣（県）植物方言（承前）」「岡山県俗習説輯報㈣」三巻三号１２月１５日 ●『方言と土俗』一巻八号１月（１２月）１日「蟷螂方言補遺」（朝鮮の部九語） ●『方言と土俗』一巻八号１月（１２月）１日「全国ヂャンケン稱呼集」（予報一三五語） ・種類百三十五になったので仮に整理して発表してみる。これは私の豫報に過ぎないので各地の諸氏のご教授を得て完全な本報を作る日の来たらん事を希望する次第である。
橘　正一			●『方言と土俗』１（１）８月　刊行開始 ※創刊号は２００部。月刊。会員は岩手県を除けば岡山県が一番多い。『岡山文化資料』の方言趣味鼓吹の功。 ※『方言と土俗』４号から３００冊 ●『方言と土俗』一巻五号１０月２５日「全国蟷螂方言集（予報七九語）」 ※岡山市の島村知章さんの訃報。享年三十六。方言家、土俗家の一大損失である。 ●『方言と土俗』１（７）１１月 本会の会員は土俗研究家が大部分。１号・２号は売り切れ。再版する。方言調査用紙を同封したい郵便規制が変わった。

昭和６年

（1931）

佐藤　清明

・『岡山と人』第二巻第一号1月1日「岡山県に於ける蟻地獄の方言分布論」（転載）

●『方言と土俗』１（１０）２月

※質問欄にて、知りたい言葉・伝説等の情報提供求む。

・『周桑群郷土研究彙報』第一巻第八号2月１０日「ヂャンケンの種々相」

・『方言資料』第二輯2月１０日

「蟻地獄全國方言集」（予報）２１８語　方言カードあり（カマキリ・アリヂゴク・メダカ）　※岡山縣に於ける蟻地獄の方言分布論につきては『岡山文化資料』第３巻第２号の拙稿を参考にされたし。

「全国メダカ方言集」（予報）２８４語　※少くとも方言の数が三百に達したら、その節、と思っていたが橘正一氏の「方言資料」が刊行されて、私のつまらぬ方言集もぜひと懇願されたため不完全乍らとりあえず取りあえず乱書してみた。※魚類の研究資料（田中茂穂氏）『動物学雑誌』第四三巻第五二号5月1日にて紹介

・『周桑群郷土研究彙報』第一巻第九号3月1日「貝類の方言」（岡山県飛島、一三語）

・『岡山文化資料』第三巻四号3月１５日「全国カマキリ方言集成」（二〇七語）「岡山県俗習説輯報㈤」

・『岡山と人』第二巻第二号3月２５日「岡山県に於ける蟻地獄の方言分布論」（転載）

●『方言と土俗』第一巻第一二号4月１０日「全国カヤツリグサ方言集」（予報）図入り六一語

※この拙き一篇を豫報乍ら「植物名」方言研究の光覚者、覗学牧野富太郎博士に捧げて韓敬の徴意を表す。私が植物名の方言を集めるやうになったのは牧野先生の「植物研究雑誌」に於ける一文読んだことに、その一つの重要なる刺激を得たのであった。

・南方熊楠と交流4月『岡山御幸記念生物論集』を送る

・『植物研究雑誌』第七巻第六号「岡山県に於けるいたどり方言の分布」（三図入り、八〇語）４月３０日

・『周桑群郷土研究彙報』第一巻第一〇号5月7日「全国イタドリ方言集」（予報）３００語

・『岡山文化資料』第三巻第五号5月１５日「全国ヂャンケン方言集（予報）１８４語」

※土俗や方言には門外漢で、研究の方法さえ十分未だ了解出来て居らぬ次第であるが折々に紹介して得た各地からの回答が夥しいほど多数になって・・とりあえず集まっただけを一束してみた。

橘　正一

●『方言と土俗』１（１０）２月

※『方言資料』は、第一輯が木下虎一郎・・・、第二輯が佐藤清明氏の「蟻地獄全国方言集」同氏の「全国メダカ方言集」、藪重孝氏の・・・と確定した。本書が出る頃には二冊とも出来る予定。

●『方言と土俗』１（１１）３月

※謄写版ずりの方言誌が続々と出る。今年は５０種に上るかもしれない。

※本誌は創刊以来半年の間に約百名の会員を増した。

・『岡山文化資料』第三巻四号3月１５日「仁徳記の虬退治の伝説について」

	昭和６年 （1931）	昭和７年 （1932）
佐藤　清明	・『土の香』二三輯　５月２８日「全国馬鈴薯方言集」（予報一〇六語） ・『園芸の友』第二七●第七号７月５日「全国馬鈴薯方言集」（右転載） ・山陽新報７月５日～７月９日　方言雑筆「メダカ其の他」 ●『方言と土俗』第二巻第三号７月１０日「全国蝶類方言集」（予報）７２語、地図１ ・山陽新報７月１１日～１６日　方言雑筆「馬鈴薯其の他」 ・『周桑群郷土研究彙報』第一巻一三号７月１５日「全国片足跳び方言集」（図１、３７６語） ・『郷土和泉』（方言号）第一巻第三号８月１日「和泉は近畿か山陽か」（訪） ●『方言と土俗』２（４）８月１０日 口絵「馬鈴薯方言地図」「馬鈴薯の方言分布」→確認 ●『方言と土俗』第二巻第五号８月１０日「全国蝌蚪方言集」 ・『岡山縣植物方言辞典』（８０３語）８月１５日 ▼『方言』１（１）９月刊行開始 ・『岡山文化資料』第三巻第六号９月１日「全国ハコベ方言集」 ・『国語教育』第一六巻第九号（方言研究号）９月１日「全国メダカ方言語彙」（５４０語） ※メダカの方言は限り無くある。しかも其の各々は標準語の普及と共に滅びつゝある。・・・ ・中国民報（図１）９月１２日～９月１５日「植物方言の神秘、イタドリと田治部」 ・『日本農業』第二七年第九号９月２０日「全国馬鈴薯方言集」（予報）１０６語 ・『汎岡山』（方言入）第六巻第一〇号１０月１日「世界に名高いカブトガニ」（図一） ・『植物研究雑誌』第七巻第九号１１月４日「全国はこべ方言集」（７２語、図三） ・『音声の研究』第Ⅳ輯１２月１６日「岡山県に於けるイタドリの方言分布論」（６７語）	・桂又三郎　中国民俗会『中国民俗研究』第一巻第一号２月２０日「動物方言資料㈠」（沖縄地方淡水魚方言、４９語）
橘　正一	●『方言と土俗』２（３）７月 ※去年の今頃は、方言を掲載する雑誌は、「岡山文化資料」と「旅と傳説」としか無かった。 ▼『方言』１（１）９月刊行開始	

	昭和７年 （1932）	昭和８年 （1933）
佐藤　清明	・『土の香』第六巻第四号４月２０日「愛知県メダカ方言語彙」（７９語） ・南方熊楠宛書状７月　本当にやりたいことは植物分類と言っている。 ▼『方言』第七巻第七号７月１日「全国蟷螂方言名彙」（２４９語）※私の用紙の第一号より第一千二百八号までの整理。他に柳田氏の方言用紙も転用を許されたので・・・ ●『方言と土俗』第三巻第五号９月「佐藤清明氏方言関係報文目録」 ※佐藤清明の略歴 佐藤氏は明治三十八年岡山県に生る。中学卒業後、独学にて博物の文検にパス。二十才の時福岡県小倉中学に就職。爾来博物の教員生活。方言研究の動機は牧瀬貞一郎氏の感化に依り、次いでは牧野博士、柳田先生、故島村知章氏、桂又三郎氏の刺戟に依ると。住所。岡山県浅口郡里庄町里見。勤務先。岡山市清心高女その他。 ●『方言と土俗』３（６）１０月１日「秋の虫と竈馬の方言概説」 ・『中国民俗研究』１（３）１１月２５日「病名方言集」 ▼『方言』２（１２）　１２月１日「内地に於ける蛙の方言」「全国蛙方言集」	
橘　正一	●『方言と土俗』第三巻第二号７月１０日 ※『国語表現』に掲載の佐藤清明さんの「メダカ方言語彙」は四百五十のメダカ方言を集めたものである。収集では最高のレコードである。 ●『方言と土俗』３（４）８月 ※甲と乙との会話 岡山の佐藤さんは、むしろ、全国的蒐集の方で有名です。 ●『方言と土俗』第三巻第五号９月「佐藤清明氏方言関係報文目録」 ※本目録は佐藤氏自の編纂せる「小著目録」より、方言関係の分を抽出せるものなり。次の略歴は佐藤氏のご報告による。 ●『方言と土俗』３（７）１１月 ※方言雑誌合評会 『方言』・・・土俗の記事がない。柳田さんがよく書いている。最近は訛音が多い。訛音なら柳田さんでなくてもかける。大家を出そうと骨を折っている。東條さん以外は七八年この方始めた人ばかりで研究歴は若い。新刊紹介が少ない。 『方言と土俗』が一番骨を折っている。『岡山縣方言集』はいい。桂さんに岡山市の方言集がないのは不思議だ。『土のいろ』『方言と国文学』『旅と伝説』などについて	●『方言と土俗』３（９）１月 ※方言研究座談会　昭和７年の回顧 『方言』国語学者の集まり。方言研究の主力が土俗学者から国語学者に移った。今までの土俗学者の研究には目もくれずに全く別の方角から・・今年中で一番印象深かったのは音声の分布の研究で柳田の「ナブサ考」と佐藤さんの「蟷螂方言語彙」だな。

昭和８年
（1933）

佐藤　清明	橘　正一
・『土の香』（創刊第五周年記念号）「採集小話　回顧五年」	●『方言と土俗』３（１０）２月 ※方言研究者合評会（柳田國男氏） ●『方言と土俗』３（１１）３月 ※方言研究者合評会（東條操氏） ●『方言と土俗』３（１２）４月 ※方言研究者合評会（大田栄太郎氏） 柳田さんを昭和方言学の父、東條さんを母とすれば、数ある子どもの中の総領息子しかも子一だ。 ▼『方言』「盛岡弁清濁音考資料」３（５）５月 ・『方言と土俗』４（１）５月 ※方言研究者合評会（吉町義雄氏） 実は今月は佐藤さんを批評する番でしたが、吉町さんが新しい仕事に着手するところなのその前に批判したほうが効果があると思い順番を変えます。 ▼『方言』３（６）　６月　新刊紹介 ●『方言と土俗』第四巻第二号６月１０日 「菫の方言」※ここ二、三年の方言学の流行は柳田國男のため。方言学は、大人数の協力によって先輩から後輩へ引き継ぐもの。一人の仕事が他の数人に興味と模倣を呼び起こしたら成功。 ※清明の本の紹介　新刊雑誌要目 佐藤清明「採集小話回顧五年」についての寸評　※あの輝かしい成功の裏には、果して、この血のにじむ様な苦心が隠れて居た。方言の採集も一の修養である。 ●『方言と土俗』４（３）７月 ※方言研究者合評会（佐藤清明氏） ▼『方言』３（８）　８月　新刊紹介 ●『方言と土俗』４（４）８月 ※方言研究者合評会（能田太郎氏） 柳田さんを御手本にするよりも、実践的には、むしろ、佐藤さんや杉山さんを御手本にした方が安全ぢゃないかな。柳田さんは半分は努力だが半分は天才だ。・・・人にはみな、名物があるものだ。たとへば、佐藤さんの動植物方言（人の役に立つ資料・人の集めた資料を借用したものではなく独自性のあるものとして評価している）、・・・

	昭和8年 (1933)	昭和9年 (1934)	昭和10年 (1935)	昭和11年 (1936)
佐藤　清明	※柳田国男最後の清明宛書簡　結婚祝い（9月6日） ●『方言と土俗』4（5）9月15日 「和歌山縣の植物方言」 ※昭和7年和歌山県の樫山嘉一氏より報告されたもの。同地の篤学なる植物研究家。南方熊楠に菌の鑑定を乞われて珍しい新菌を見つけたこともある。	▼『方言』4（1）　1月 「ヒキガエルの方言」 ※私は今、蛙の方言を整理しつつあるが、他の用事が忙しいので、十分な整理の余裕のないのが何よりも残念である。 ・「吃逆の民俗的研究」	▼『方言』5（1）1月 「全国菫方言集」 ※橘正一氏が菫の方言に就て記述されて居るのについ興味を引かれ、私も方言用紙を早速に整理してみたら百語以上あった。 ※柳田からの引用あり ・柳田国男『方言覚書』清明のイタドリ研究評価 ・『現行全国妖怪辞典』5月	・『岡山縣動物方言辞典』4月（非売品）
橘　正一	▼『方言』3（9）9月　新刊紹介 ●『方言と土俗』4（5）9月 ※方言研究者合評会（永田吉太郎氏） ▼『方言』3（10）10月　新刊紹介 ●『方言と土俗』4（6）10月 ※方言研究者合評会（宮良當壮氏） ▼『方言』3（11）11月　新刊紹介 ●『方言と土俗』4（7）11月 ※過去四年間を顧みて ●『方言と土俗』4（8）12月 ▼『方言』3（12）　12月　新刊紹介	●『方言と土俗』4（9）1月　最終巻 ▼『方言』4（5）　5月 「おてだまの方言」	▼『方言』5（2）2月 「ナモシの分布」 ▼『方言』5（6）6月 「人形の全国方言」 ▼『方言』5（7）7月 「土佐の方言」の成立 ▼『方言』5（11）11月　書評 ▼『方言』6（9）9月 「方言語法研究の現状」	

清明資料解題

清明の投稿「採集小話　回顧五年」を発見！

小野礼子

佐藤清明は昭和３(1928)年からの数年間積極的に方言の収集を行い、次々に方言集として発表していきました。収集の方法は、これまで全国の学校に向けて手作りの方言収集用紙を郵送したのではと考えられていましたが、回収された用紙がほとんど残っていないので具体的な収集方法はわからないままでした。このたび、ある偶然から清明の方言収集に関する文章が発見されました。清明は、愛知県の加賀紫水が昭和３(1928)年に創刊した民俗研究誌「土の香」の創刊5周年記念号に、「採集小話 回顧五年」という文章を投稿していました。「土の香」は、昭和11（1936）年に140号で途絶え、その後忘れられていましたが、平成25（2013）年に復刻されその中に清明の文章が掲載されていたのです。復刻版を刊行した樹林舎の許可を得て会報に「採集小話　回顧五年」を全文掲載することができました。

その内容は驚くべきものでした。今まで清明の著作は、感情を意識して排したような印象を受け、論考の始めか終わりに少し私見が入る程度でした。しかし、この文章には方言収集の苦労話が書かれ、清明の偽らざる正直な気持ちが綿々とつづられています。頭を下げて方言用紙を書いてもらったものの思うような結果が出ず、書いてもらった相手に嫌味を言われ馬鹿にされたと感じたことや、郵送費が家計を圧迫していることなどを自虐的に、ユーモアたっぷりに書いています。具体的に方言の収集は、①受け持った講習の参加者に配布②通信雑誌の交換欄を利用③知人に頼んで用紙を配布してもらうなど、あらゆる機会を使って行っていたこともわかりました。

また、新たに分かった事実として、歩兵第十連隊の山本茂雄大尉と清明がどのようにして出会ったか今まで不明でしたが、今回この文章で明らかになりました。山本大尉は、「柳田国男氏岡山に来る」の新聞記事を見て自らやってきたとされています。「案内もせぬのに只新聞で見たとて。サーベル厳めしい陸軍大尉の正装した青年士官がゴトゴトと楼上に上がって来た」と初めての出会いが臨場感たっぷりに描かれています。他にも島村知章との想い出や、学問半ばで病に倒れた友人の話など多くのエピソードがちりばめられています。清明の若き日の情熱と悩みがあふれんばかりのこの文章をどうぞ読んでください。

採集小話　回顧五年

岡山　佐藤清明

本誌が今回五周年になって、本号を以てその記念号とせられると云う。振り返って見ると、私の全国的採集が愈々本格的になってからも、凡そ五年程になるように思われる。そもそもの始めに、博物名を全国的に集めてみたら、と思い付いたのは五年以上の昔ではあるけれど、カードが続々集まってきて　その整理に多少は時間をつぶすようになったのは何といってもここ五年位が真剣味の時代であろう。

□

最初の間には全国各地から材料を集めることが苦悶の種だった。この頃に私より一寸早く採集を企てた人に牧瀬貞一郎兄があった。驚くべき天才的の総合的智識を持ち合わせた牧瀬兄は当時「日本地名学」の完成にスタートを切って居た。陸地測量部の地図からヤツとかヲとかサワとかニゴとかナダとか云う処をこくめいに類聚して、さてその上に全国的に採集を進めて行こうと氏は決心して居られたらしい。

□

牧瀬兄は雑誌「新知識」を発行して、これによって採集に利し、また「科学画報」にも広告して地名を読者から採集し、更に町村役場に片っぱしから往復ハガキを飛ばされた。採集に志したものの必ず行き当たる「手がかり難」を充分に味われて居た頃、私は牧瀬兄と親友になった。兄の苦労は今から考えてみてもゾッとする事がある。噫（ああ）!!好事魔多し、牧瀬兄は今、空しく徒にドイツの地名を口走りつつ難治の病名のもとに春秋に富める余生を送って居られる。歳月五年!! 既に採集界に此の犠牲者を出した。

□

岡山では島村知章氏が洋々たる前途を抱いて土俗学の多事多端なる諸相を語って示して呉れたのも、その少し後であった。その島村氏も脳膜炎で長逝して了(しま)った。彗星のように岡山に現われ、彗星のように、ほんとに氏は一瞬にして姿を隠して了った。私は島村氏にはそう度々お目にかかる事はなかった。然し氏より受けた印象はかなり深い。あの常に袴をはいて威儀を正して端座し、攻々として文筆を運ばれた氏の教訓は忘れ得ぬ一つである。「お互に急がずにやろう」と私も顧みて懇に健康を戒められた氏、その自身が蒲柳の質、私よりも先に白玉楼中の客となって了われたのだ。

□

□

島村氏の長逝後のこと、柳田先生が岡山へ見えて、私は桂氏と二人で民俗座談会を主催した。どうせ田舎の都市だもの、民俗学などに出席するものもあるまいと思って居たところその席上には案内もせぬのに只新聞で見たとて、サーベル厳めしい陸軍大尉の正装した青年士官がゴトゴトと楼上に上がって来た。こんな人が来るとは予想外だった。後にその大尉は一躍して熱心なる土俗学のグループに入られた。行ってしみじみお話を聞こうと思う間もなく、突然起こったのは例の満州事変、第十連隊から選抜されて最先に征途についた第六中隊長山本茂雄氏が即ち此の人だ。

くだかけの長なき鳥のなくままに　旭ぞ上るの満州(マンシュウ)の広原(ヒロハラ)

と年頭に一首を詠んで大尉は北満にいま一ヶ年も征衣を固めて居られる、これもわが同志の一人だ。

□

採集に短気は無用だと私は考える。一気に採集をやろうと欲を考えたとて、世間の人は自分一人の利益のための存在ではない。これを書いて方言を教えろと云ったとて、オイソレ、ヨシキタと方言を何のはずもなく教えて呉れる人は実に暁天の星なり矣(かな)だ。且てこういう話もあった、私は或る小学校教員の講習に講師として頼まれて出席し、二､三日暑いのに力瘤を入れて、特に親切に講述したつもりだ。それは講習会の後で、実は方言用紙を配って会員全体に書かそうという企みが私にあったからだ。そんな企てのあろうとは知る由もなく、会員は感謝（？）しつつ受講して呉れた（？）而(しこう)して講習は終わった。さてその時である。

講師たる私はわざわざ壇を下りて頭を屈めて方言の記入を懇に依頼した。用紙は一々配布し、手にとらんばかりにして一々丁寧に頼んでみた。会員は引き受けたと云わんばかりに微笑んで用紙を読んで居る。三十分も待って、私は期待して箱を開けて見た時、何という悲哀でしょう。用紙の入れてあったのはタッタ三枚。しかも姓名などの欄は匿名になって役に立たぬ。これも五年回顧の失敗談!!

□

ある通信雑誌があった。その附録には交換欄という処があって、私は編集者の好意で方言を集めた、この時には来た来た数十通の方言報告が日々到着した。それ等は多くは田舎の青年だった。私は喜んで後から礼状を出した。しかし只一つ礼状に副えて書かねばならぬ事を書きあぐんだ。それは、どの報告にも。殆んど九十％は余白に次の事を問うて居た。「方言を集めて何にしますか」。「方言を集めたら本にして売るんですか」。

「方言を集めるとは奇妙な道楽ですね？」＆SO．ON．etc.

□

岡山の六高で生徒に用紙を配った。どうか書いて下さいと頼んでみた処、学生は皆一斉に好意を以て記入して呉れた。それは宜かった、だが然し、用紙が大部分は空欄になってメダカの方言などは何もないのが多かった。「これは私のひとつの道楽だ」と方言採集欲の説明をして頼んだ。－「金のかからぬ道楽ですね」－

こんな、ささやきが学生に多かった。しかしながら採集五年、僅かな年月ではあっても貧乏な私には少くとも採集費は僅少だったとは言え無い。二千枚の用紙を集めるのに印刷した用紙は既に数万枚である。二銭ずつ貼って出して返信料を沿え、また礼を出して時には別刷やパンフレットを送る。しかしこれも道楽だから仕方がない。爾来私は方言の通信費は出納簿に一切かかぬ事にして居る。かけば悔やみの種だから。

□

博物の会で多くの中等教員に方言分布を説明して用紙を配った。先生達は皆、争うて用紙を奪い方言分布を質問して興味は熱中して居た。「どうか一つ記入してください」「ハァ結構です、いずれ後から」この後からという言葉は少なくとも五年六年では後からの部に及びもつかぬという事も採集五年目にして初めて私はわかった。

□

ある僧侶に会った。この人は仏教の某大学に務めて、同じ宗派の学生が全国から集まる。特に寺の「お坊さん」は物知りであり「山の生活」の体験者ばかりだ。「後から私の学校の生徒に」こう言って持って帰られた用紙はドッサリとあった。しかもそのドッサリある用紙が全部持って帰って来て、一枚に二，三人ずつ共同して書いてあった。こんな事なら、もっとお願いすればよかったとも思ったけれども、これは失礼なことと御遠慮申し上げている。「この後から」ほど採集家を喜ばすものは無いのだ。

□

採集用紙は紙で作ったアズサ弓だ。こんな風に考えたのも五年の昔になった。一喜一憂五星霜、博物名など集めて何になるか。笑われてもいい。お前の整理はウソの皮だ、叱られてもいい。どうせ方言採集や語彙整理に志したからには感情を忘れて、牛の歩みを続けねばならぬのだ。もう此頃は少々の事には悲観せぬ悟り（？）を開いては居る。しかし、悟り（？）もまたあやしいものではある。

（原文は縦書き）

・・・・・・・・ 訃報・当会顧問土岐隆信様 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

当会発足時から顧問としてお世話になりました土岐隆信様には、かねてご療養風のところ去る11月29日、81歳をもって旅立たれました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

＜ご略歴＞

昭和18年岡山県生まれ。薬剤師、岡山県職員（薬務課・保健所・県立岡山病院薬剤科長）、平成15年株式会社エバルス顧問、岡山県医薬品配置協議会研修運営委員、日本薬史学会員（理事・2023年 年会長)、佐藤清明資料保存会顧問。

備中売薬の歴史、岡山県で戦前・戦後に栽培されていたハッカやケシの栽培の歴史、県北を中心とした民俗学調査等の調査研究に取り組む。明暦3年（1657）創業の薬種商で家業を超えて地域振興に貢献した林源十郎商店の記念館設立（2012年3月開館）にあたる。

＜論文・講演・著作等＞

岡山県におけるけし栽培の歴史　土岐隆信 奥田拓男　薬史学雑誌25(1)　1990

岡山の薬草(1984)・続岡山の薬草(1992)　共著 山陽新聞社編・奥田拓男監修　1984・1992

備中売薬 岡山の置き薬（木下浩氏と共著）　岡山文庫269　2011

高梁川を科学するPart2（共著）　岡山理科大学『岡山学』研究会／編　2012

佐藤清明と岡山の植物関係者　佐藤清明資料保存会会報　第３号　2019

講演「岡山からの薄荷栽培」2019.3.10.　主催:備中の歴史と文化を守り育 てる会　2019

記録 明治以降の岡山県における民間の植物研究の軌跡
岡山県自然保護センター研究報告第27号　2020

里庄町出身の研究者 佐藤清明、横溝熊市、安原清隆氏についてー
佐藤清明資料保存会会報 第６号　2020

林源十郎商店物語（企画・共著）　同編集委員会　2020

大塚薬報 NO763－医のある風景⑧ 林源十郎商店物語－　2021

山田方谷とその時代－制度・人・物から読み解く－（分担執筆）　方谷研究会　2023

惜別

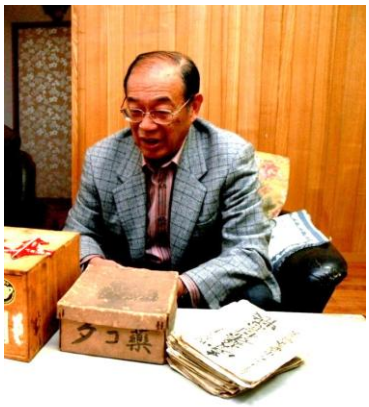
土岐隆信さんを悼む

名誉会長　生宗脩一

土岐隆信さんが亡くなられた。佐藤清明資料保存会の顧問として専門的知識や経験を活かし貢献された。昨年11月29日に81歳でした。私はまさか亡くなられるとはゆめゆめ思ってもなくて、誠に残念です。

土岐さんは京都薬科大学を卒業、岡山県薬務課や保健所、岡山県立病院薬剤課勤務、薬剤師資格をもち、株式会社エバルスの顧問等も歴任し病気に対する予防知識は十分持たれ誠実に勤務された。また、日本薬史学会2023年会の会長として同年全国大会を主催されました。

土岐さんとは平成29年8月図書館で開催中の「里庄町のせいめいさん展」に来られ、熱心に展示資料を見られていたところに、私から声掛けしたのが最初でした。この時清明研究会への入会を依頼し、即決でお力を貸して下さることになりました。さらにこの時里庄町には安原清隆さん、横溝熊市さんなどの植物研究者がいることを紹介して頂きました。



植物研究や岡山県の研究者など詳しい知識と経験を持たれ、特に薬用植物等に詳しく佐藤清明資料保存会にとってはありがたく、多くの専門的情報の提供を頂きました。

執筆活動での貢献も多く、佐藤清明資料保存会会報にＮｏ３に巻頭言で「佐藤清明と岡山の植物研究者」、Ｎｏ６で「明治以降の岡山県における民間の植物研究の軌跡」を発表し、『博物学者　佐藤清明の世界』岡山文庫では「教育者としての清明、幅広い交流」の中で清明さんの叙勲祝賀会（1981年5月）開催時に「岡山県植物研究会」発足について記し、清明さんとの直接の交流や指導を受けたことを紹介されました。

薬剤関係の専門誌にも執筆が多く、木下顧問との共著『備中売薬―岡山の置き薬―』岡山文庫がある。

清明さんが愛された菊桜についても、土岐さんは六高や後楽園の菊桜については清明さんから直接の現地指導を受けた。また岡山大学の菊桜が弱っている情報やその再生策の助言をくださり、私たちがこの菊桜を再生する活動時には参加され応援を頂きました。土岐さんと親交のあった岡山大学の当時副学長からの陰ながらの助言を頂き、また岡山大学薬草園において同園教授の案内も頂きました。4月には岡山大学本部前の成長した菊桜の観察をして、土岐さんの姿を忍びたい。　心からご冥福をお祈り申し上げます。

ルポ　ある寒い冬の日に ･･･ 菊桜育成保存会の活動の一コマ ･･･

2019 年 12 月、里庄町歴史民俗資料館前にキクザクラの苗木 2 本を植樹、その後、2024 年に第 74 回全国植樹祭記念植樹として、町内各所（幼少中・公民館・つばきの丘ほか）に 8 本。さらに、会員有志が、各自で挿し木をして育てた台木（オオシマザクラ）に、キクザクラを接ぎ木して育成中であることもあり、かねてよりご指導いただいている国忠樹木医が、小雨模様の中、佐藤清明生家・歴式民俗資料館前庭当での管理作業の見学を兼ねて、育苗にかかる手ほどきを頂いた。参加者は 11 名で作業は、2025 年 2 月 2 日・3 月 2 日の 2 日にわたっておこなわれました。

歴史民俗資料館前庭にて

樹木医が、作業の都度、その作業の目的と意義・方法を説明しながら進められたので、スキルにレベル差のある参加者一同であったが、それぞれに理解が進みはげみになった。

防草シートをはがし、土と根の管理

日当たりと風通しを考慮して剪定

里庄中学校校門脇にて

シートをめくり化成肥料を施す

ここでの内容は、植樹する場所の選定の基本、水やりと施肥の時期と方法等。

指示を頂きながら、化成肥料を、１本あたりの目安２kg を施す。

佐藤清明生家にて

母樹から挿し木用の枝を採取

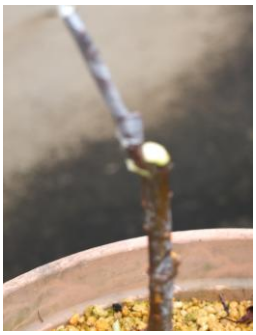
剪定鋏の刃先に注目しながら説明を受ける。

枝の切り口に癒合剤

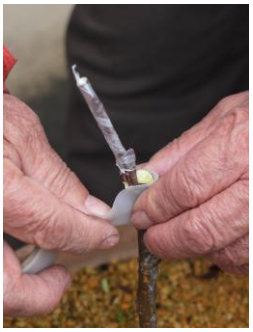
自宅で育成した台木を持参

接ぎ木の成否は、刃物が決めて。（樹木医愛用のナイフ）

母樹から採取した枝から、穂木を取り、挿し穂として整える。



台木の形成層の位置に切込みを入れ、挿し穂の形成層の位置を合わせ、保護テープを巻く



接ぎ木を終えた苗木（養生の後、定植の運びとなる。）

余談：
作業後、資料館のスタッフの計らいで、一室を提供され、予定外であったが国忠樹木医と懇談の時を持つことができた。
質疑への丁寧な対応とともに叱咤激励も頂くことができ、小雨交じりの寒い日でしたが、１時間を超えて心温まるかつ有意義な時を過ごすこととなった。

＜編集後記＞

昨年の暮れ、当会発足当初から顧問としてお世話になっておりました土岐隆信様が旅立たれました。若き日に生前の佐藤清明との接点をお持ちで、清明と同時代の研究者の方々との交流の様子にも詳しく、何かと私どもの行く手を照らしてくださいましたことに感謝申し上げるとともに謹んでご冥福をお祈り申し上げたいと存じます。生宗脩一名誉会長に土岐様のご紹介をお願いし、あわせて、ご略歴と論文等の中から、当会の活動に関係すると思われるものをリストアップして掲載いたしました。お役に立てば幸いです

本号の巻頭論考として、会員の藤井成加氏に、2023年10月の清明を読む会での発表内容にその後の研究成果を加えてご執筆頂き、また小野礼子氏に新発見資料の紹介をお願いしています。

（会報担当・佐藤泰徳）

佐藤清明顕彰特設サイト

佐藤清明資料保存会会報　No.14

発行日　令和７年３月２５日

発行者　佐藤清明資料保存会・里庄町立図書館

会長　加藤泰久(里庄町長)　館長 田中孝治

住　所　719-0301岡山県浅口郡里庄町里見2621

電　話　0865－64－6016

ホームページ：http://www.slnet.town.satosho.okayama.jp

Eメール：slnet@slnet.town.satosho.okayama.jp